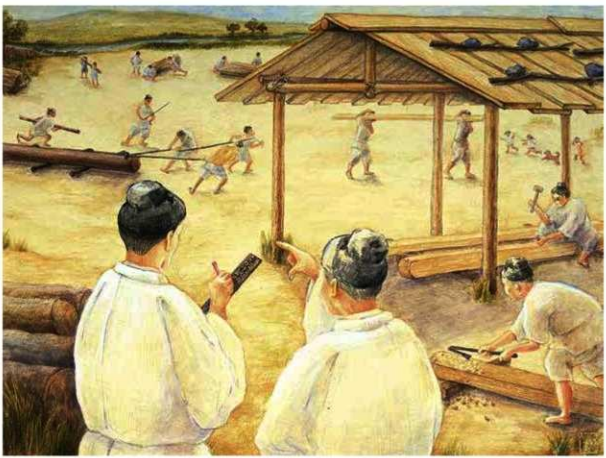
生活・文化２

生活の中の木簡

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



木簡を使用する役人　下級役人が木材の積み出し量を木簡にチェックしている。木簡は木材とともに都へ送られた。

情報交換を行なう手段として、文字は欠かせないものである。自分の気持ちを伝えるためには手紙を書くだろうし、情報を得るためにはあふれんばかりの本の中から自分に必要なものを探して読んだりする。言葉を伝達するための媒体として、紙は大きな役割を果たしている。私達の周りには、紙があふれている。しかし、何気なくあたりまえのように使っている紙も一昔前まではとても貴重なものだったのである。

『日本書紀』には、推古天皇18年（610）に高句麗（こうくり）から来日した曇徴（どんちょう）という僧が紙と墨の製作技法を伝えたと記されている。これ以降、律令国家の成立にともなって文書による行政処理が行なわれるようになる。現在、正倉院（しょうそういん）に奈良時代の文書がたくさん残っている。それらの文書のほとんどが、表だけでなく裏も利用されていることはよく知られている。紙は事務処理や記録には欠かせないものである。しかし、当初は紙の生産量が少なく、その補助的な役割を木が担っていたのである。木は紙にくらべて丈夫で手に入れやすく、削れば再利用もできる。このような木の性質を利用して、文字を記した札が木簡（もくかん）なのである。

奈良の平城宮の発掘調査では、多数の木簡の出土が報告されている。それらの中には、食料を請求する木簡や役人の勤務評定にかかわる木簡、あるいは平城宮に運ばれた貢物に付けられた付け札や、役人がつれづれに書いた習書（手習い）など様々な木簡がある。また、平城京左京二条二坊の発掘調査において10万点に及ぶ木簡が出

平安京西市周辺出土の習書木簡

土し、長屋王に関する記載が話題を呼んだ。これらの木簡によって、古文書ではわからない奈良時代の隠された部分が明らかになるとともに、多様な木簡が紙と併用されていた当時の様子を知ることができる。

平城京から遷都した長岡京でも多くの木簡が使用されている。1988年に長岡京左京一条三坊の発掘調査を行ない、京域を北西から南東に流れる流路から多数の木簡を発見した。この中には、未加工の建築部材を進上したことを示す木簡や、馬小屋のまぐさを刈り取る者五人の名前を報告した木簡などがある。また、貢進された鹿の干し肉の付け札や習書木簡、人名を記してまじないに使った人形もあり、平城宮出土の木簡と同じような様相を示している。

出土した木簡の中で多くを占めるものは、習書木簡である。先の長岡京の調査では、表に「授田使大和長官神王」、裏に「太政官誠忌…」と書かれた習書木簡が出土した。神王とは桓武天皇の時代に右大臣までなった人物である。また、平安京西市周辺の調査では、「□薬供進其事甚重」と書かれた習書木簡が出土し、「皇□□（太子か）」の文字も判読できた。このような習書木簡は、思いついたままに記されたとは考えにくい。おそらく、公式な文書を作成するうえでの文字の練習として書かれたものと考えられる。このほか、「有有有…」と同じ文字を書き連ねたり、「田廣廣廣應應雁鷹雁鷹」とよく似た難字を書いた習書木簡もある。

当時の役人にとって文字が正確に書けることは必要最低限の条件であった。しかし、文字の練習をするには、紙はあまりに貴重だった。多くの習書木簡からは、名もなき役人たちの真剣な筆使いが感じられる。

鳥羽離宮出土の呪符木簡

御土居出土の荷札（上）と近代の木札（下）

平安時代も後期になると、荷札は使用されるが、事務処理や記録は紙だけで行なうようになり、行政処理に用いた木簡は見られなくなる。そして、荷札とともに卒塔婆などの仏教に関係した供養札や物忌札が多く作られるようになる。鳥羽離宮東殿の調査では、平安時代後期の溝から呪符・柿経・卒塔婆などが多量に出土した。豊臣秀吉によって築造された御土居の調査では、濠から様々な付け札が出土し、中には表を日本語で、裏をポルトガル文字で宛名を表記した荷札もあった。また、伏見城下の屋敷町からも竹類を扱う職人の付け札が出土している。さらに、JR嵯峨野線の線路敷きの調査でも、近代の木札類が発見されている。付け札や卒塔婆などは木の特質を利用したものであり、現在でも私達の生活の中に息づいているのである。